ころさない・ころされない・ころさせない

非戦イヤです！通信

発行:2006・9/5
第１号

発行：「靖国合祀イヤです訴訟」と共に闘う会
連絡先：大阪市西成区津守1-13-28
ﾌﾘｰｽﾍﾟｰｽﾛｰｶﾙ内
ﾌｧｯｸｽ：06-6562-6905
http://www.geocities.jp/yasukuni_no/

「靖国合祀イヤです訴訟」提訴！

靖国神社を相手取ったまったく新しい裁判が始まる

第一回弁論

１０月２４日（火）１時半～ 大阪地裁 ２０２大法廷にて

（詳しくは後日お知らせします。多数傍聴を！）

原告三名の意見陳述が予定されています。

2006 年 8 月 11 日、靖国神社に親族が合祀されている遺族 9 名（日本人 8 名、台湾原住民 1 名）が、靖国神社と国を相手取り、合祀の取り消しを要求する訴訟を大阪地裁に提訴しました。

これがまったく新しい裁判であるというのは、靖国神社を被告として、合祀の取り消しを要求しているという点にあります。

実はこれまでにも合祀取り消しを要求する訴訟がありましたが、それは国を被告とするものでした。また、小泉首相の靖国神社参拝に対して全国 6 箇所で７つの違憲訴訟が繰り広げられましたが、そこでも主要なターゲットは国と小泉首相であり、首相が靖国神社を参拝することが政教分離違反であるかどうかが主要な争点でした。

しかし、今回の裁判では、靖国神社の根幹を成すシステムそのものに切り込むことになります。そのシステムとは、戦争で死んだ人々を、日本の戦争のために役に立ったかどうかという基準で一方的に選別し、その基準に合致した戦死者を「英霊」として祀ることで、見習うべき模範とし、後に続かせるということにあります。

遺族たちは「分祀」を要求しているのではありません。国家によって祀られることそのものを拒否しているのです。

さて、当日の昼過ぎ、大阪地裁前に原告と支援者が続々と集まってきました。そして、1 時半に予定された提訴に向けて、裁判所の外の入り口のそばで列を作りました。先頭には、原告団長の菅原龍憲さんを真ん中に、その両脇に、同じく原告で台湾の原住民アウィーさんと、この裁判の原告ではありませんが、一連の違憲訴訟で「違憲判決」を勝ち取った台湾訴訟の筆頭原告であったチワス・アリさんとが「靖国合祀イヤです訴訟団」と書いた横断幕を持って並び、他の原告と支援者がその後ろに続きました。

その列そのものは歩道全体に広がってはいないのに、報道陣が取り巻いたために、一般の人が通りにくくなってしまいました。それを見咎めた警備の人から、さっそく「道を開けなさい！」という強圧的な物言いが飛んできました。

さらに驚いたことには、警備担当の 1 人が「これはデモ行進だ！」「デモ行進の許可を取っていない！」と言い出したのです。裁判所に入ろうとして歩道を少し歩くことが、許可の必要な「デモ行進」になるとは、まったく前代未聞の珍解釈です。

原告らの列はすぐそばの門から入ろうとしていたのですが、裁判所の方からやってきた係の人が、報道陣が映像をうまく取れるようにと、正面を少し歩いて 20 ～ 30 メートル先の入り口から入るよう指示をしました。その指示に従って列が動き出すと、さきほど「デモ行進」云々を叫んでいた警備担当者が「だ

れがこんなことを決めたんだ！」とわめきだしました。私はその様子を見ていて、半ば可笑しく、半ばあきれ果てていました。

ところが、その直後、もっと深刻なトラブルが持ち上がりました。台湾の報道関係者が、敷地内での撮影をしようとすると、取り押さえられてしまったのです。裁判所というところはまったく奇妙なところで、敷地の外から裁判所を撮影することは自由なのに、敷地から一歩でも足を踏み入れると、そこでの撮影は一切禁止なのです。しかし、記者クラブに加盟している報道関係者は、敷地内でも撮影ができるのです。チワス・アリさんは、台湾の報道関係者が撮影を阻止されたことに抗議の意を表明するために、裁判所に入るのをしばらく遅らせました。

こうしたいやがらせは、やはり台湾の人々に対する差別意識の現われではないかと思われてなりません。大阪高裁での違憲判決（2005年9月30日）を勝ち取った台湾訴訟も、大阪地裁での一審判決（2004年5月14日）は、これまでの違憲裁判の中で最悪の判決でした。その時、チワス・アリさんは身を震わせて「台湾はまだ植民地なのか！」と叫んだのでした。小泉首相の靖国参拝を私的なものと判断し、いわば小泉首相の行動にお墨付きを与えるようなものだったのです。（ある意味、あまりにもひどい判決だったので、高裁ですべてをやり直した結果、「違憲」という真っ当な判断がなされたと言えるかもしれませんが…。）

決起集会＆「共に闘う会」発足集会

その夜、「靖国合祀イヤです訴訟」決起集会と「共に闘う会」の発足集会が行なわれました。私もさっそく「共に闘う会」に入会しました。

この決起集会では、あらためて、原告および弁護団の紹介がなされました。この時出席されていた原告は、総勢9名のうちの7名でした。そのひとりひとりが、靖国との関わりとこの裁判にかける思いを述べました。亡くなった方のことを思って涙ぐんでいる方もいました。箕面忠魂碑違憲訴訟、愛媛玉串料訴訟、そして小泉靖国訴訟などで、長期にわたって粘り強い活動をしてこられた方もいれば、昨年お父さんが合祀されていることを知ってはじめてこの運動に加わった方もいました。その方は、1年8ヶ月の間に29回も靖国神社と手紙のやり取りをし、これまで知りえなかった貴重な情報を引き出すことに成功しました。そのことは、この裁判を闘う上で大きな武器になることでしょう。

台湾の原住民アウィーさんは、義父が高砂義勇隊として戦死し、今、靖国に祀られています。また、おじいさんは「霧社事件」（1930年日本の植民地支配に抗して起こった武装蜂起）で、頭目のひとりとして処刑されました。アウィーさんの家族史は、まさに台湾全体が被った侵略と植民地化の歴史そのものです。アウィーさんの思いを裁判所の中で明らかにすることで、台湾での日本の植民地支配の実態が白日の下にさらされていくことでしょう。

弁護士の方々は、小泉靖国訴訟ですでにおなじみの方ばかりですが、「いよいよ本丸に迫る訴訟になる。」「今まで一番やりたかった訴訟だ！」と、みなさんたいへん意気軒昂でした。

そして、靖国神社を相手取って合祀を取り消させるという訴訟が、これまでなぜ行なわれてこなかったのかが説明されました。それは、「合祀」が宗教行為である以上、「合祀の取り消し」もまた宗教行為にあたるのではないかという考えがこれまでの法律の世界の常識だったからです。つまり、裁判所という国家機関が、靖国神社という一宗教法人に、特定の宗教行為をするよう命ずることは、それ自体が政教分離原則に抵触してしまうということなのです。誰よりも政教分離原則を重んじる人々がその原則を自ら破るようなことはできません。合祀の取り消しを目指す人々は、こうしたジレンマに悩み続けてきました。

しかし、今回の訴訟では、これまで国を相手取った訴訟とは異なる新しい発想の法律構成で臨むことになりました。靖国神社を相手に憲法は使いません。憲法はあくまで権力を縛るものです。この訴訟で使用するのは、民法の不法行為の一般原則（権利侵害から損害賠償請求権が発生する）です。そして原告が靖国神社に侵害された権利は、「人格権に基づく自己決定権」です。靖国神社は遺族に無

断で戦死者を合祀することで、死者と遺族とのかけがえのない絆を断ち切ってしまいました。仏教の僧侶であるのに神道の神にされてしまう理不尽、台湾原住民であるのに侵略者である日本の神にされてしまう屈辱、戦争は二度と嫌だと願う人の肉親が「英霊」とされ国家のための死を称揚されることへの怒りと悲しみ…。その人を人たらしめる人格権に対する侵害が行なわれたのは明らかです。最高裁判決でも、「人格権」は確立された権利として通用しています。

一方、今回の訴訟では国もまた被告として訴えられています。国に対しては憲法が威力を発揮します。戦後、国・地方自治体・靖国神社が一体となって合祀を進めていった具体的な証拠が新たに次々と明らかになってきました。これは当然明らかに政教分離に違反します。

このように、まったく新しい訴訟に挑むという、困難ではありますが重大な意義のある訴訟の勝利目指して、弁護団の方々はとても意欲に燃えているようでした。

それから、こうした訴訟の先駆者ともいうべき山口県自衛官合祀訴訟を闘ってこられた中谷康子さんのお話がありました。中谷さんはキリスト教徒で、亡くなった自衛官の夫が護国神社に合祀されることを拒否したにもかかわらず、彼女の意向は無視されてしまいました。彼女は 1973 年、この合祀取り消しを求めて、国と自衛隊の隊友会を相手取って裁判闘争を闘ってきました。一、二審では勝訴したのですが、88 年の最高裁で逆転敗訴してしまいました。

中谷さんは当時の心境を「最初は何もわからないからこそ“いやです”が言えた」と語り始めました。最初はなぜ自分がこんな立場になったのかわからず、「あなたひとりの裁判ではない」という励ましにも、なかなかそうは思えなかったが、最後には「この裁判は起こるべくして起こったという認識」をもつことができた、「私憤から公憤へ」にたどり着くことができたと自分の心の動きを率直に語りました。中谷さんはこの裁判を通じて「自分が変わった」と笑顔で述べました。そして、まだまだわからないことがたくさんあるがこの裁判でそれを解決してほしい、靖国問題に関わることが自分の解放につながる、と述べました。そして「これで勝利をしなければ日本はどうなる！」という力強い言葉で、お話を締めくくりました。

靖国神社を相手取った合祀取り消しの訴訟は、これを皮切りに、韓国でも、そして沖縄でも次々と提訴することが予定されています。韓国のイ・ヒジャさんから、「靖国の“神”との戦いでは人間が勝つ！」という確信に満ちた言葉が述べられました。

最後に、この「共に闘う会」の事務局の菱木さんから、この訴訟の意義についてのまとめがありました。現在は、大勢の遺族の中に、「本来はありがたいはずの靖国神社に A 級戦犯が祀られているのがけしからん」という考え方があるが、この訴訟を通じて靖国の残酷さを明らかにし、靖国の信者であることが恥ずかしいと思うようになる人を増やしていけば、それが我々の勝利だと。「靖国には A 級戦犯こそがふさわしい」との菱木さんの言葉に、私は思わず賛同の拍手を送りました。

憤怒と屈辱の涙ではなく、歓喜の涙をもって判決の日を迎えんことを！

吉岡　奈緒子

裁判所前、提訴にむけて！台湾原告と菅原龍憲原告団長たち。暑い暑い、灼熱の一日だった。

以下、小泉首相８／１５靖国神社参拝強行に対する訴訟団の抗議声明です。

抗　議　声　明

2006年8月15日、小泉首相は、内外の批判に一切耳を貸さず、昂然と靖国神社参拝を実行した。

2001年に始まる首相参拝について、昨年（2005年）9月30日の大阪高裁は明確に違憲と判断した。「公約」としての参拝は、他のどのような詭弁を弄しようが、職務行為としての外形を示すこと、神社参拝という客観的な見地から憲法が禁止する国の機関の宗教活動に当たると、疑問の余地なく認定している。首相の今回の参拝は、ことさら「公約」を強調、司法を愚弄するものであり、許されるものではない。

公務員に特別の遵守義務がある憲法を守らない首相に、五年もの長きにわたって耐えなければならなかった私たち民衆の怒りは、今や頂点にあることを思い知るべきである。

靖国神社は、戦没者を追悼するのではなく顕彰することによって、先の侵略戦争を正当化すると同時に、未来の若者たちを戦争への動員の模範として利用するという機能を備えた「侵略神社」である。

この神社に、行政の長が参拝を繰り返すことは、単に国内法の無視にとどまらず、侵略・植民地支配に苦しんだ近隣諸国に対する挑戦でもある。二度と侵略しないと誓った日本国憲法の約束を、世界中の人びとに向かって「無視する」という宣言を行ったに等しい。

小泉純一郎という「人間」には、何を言ってもむなしい。しかし、私たちは満腔の怒りをもって、この参拝に強く抗議する。

2006年8月15日

小泉首相靖国参拝違憲アジア訴訟団

三人目の原告西山誠一さんの合祀取り消し訴訟に向けた思いを紹介します

合祀取り消し訴訟提訴理由　原告・西山　誠一

１．原告の父西山政勇の死亡

原告の父西山政勇は、陸軍山砲兵として日中戦争に従事、１９３８年５月１２日徐州付近の戦闘に於いて胸部貫通銃創を受け、６月２０日金沢陸軍病院へ転送、１９３９年２月１７日東京臨時第一陸軍病院へ転送、１９４０年３月２７日死亡。１９４２年１０月１４日、靖国神社に合祀。

２．原告の生い立ち

原告は、１９３１年１月７日西山政勇の子として誕生、１９４６年３月敗戦のショックにより、旧制中学３年（終了）中退、以後現在まで家業としての農業に従事する。その間青年期に縁あって真宗に帰依し、１９７８年東本願寺において得度式を受け真宗大谷派の僧侶となる。又１９９８年大谷専修学院へ入学し、一年間本願念仏の教えに学ぶ。

３．原告の父西山政勇の信仰

父は病院で療養中に付き添いの原告の母に話された言葉ですが、「仲間の軍人が死ぬ時に『天皇陛下万歳』を叫んだ者はその場ではほとんど死なない。自分も『天皇陛下万歳』をとなえた方だ。本当にその場で死ぬ者は、『お母さん』とか妻子の名前を呼ぶものだ」と。又、父の臨終には病室に響き渡るような声で「南無阿弥陀仏」を称えたと母や祖父母から何回も聞かされました。真宗の所依の経典『仏説観無量寿経』にも臨終に念仏を称えることを勧める言葉があります。父は念仏の信仰に生きられたのであります。

４．原告の信仰

青年時代に大谷派の仏教青年会に入会し、その後大谷派の同朋会運動に参加して大谷派の現代教学を学びました。特に戦争と平和の問題を真宗に学びました。日本国憲法の大切さを知ると同時に過去の戦争の加害・被害共にその責任を痛感しています。父の戦死は被

害でありますが、外国まで出かけた戦争は加害であります。如何なる戦争にも、戦争に正義はありません。戦争に敗けて得たものはただ一つ、それは憲法９条です。しかし現在の日本は戦争放棄を謳った憲法を持ちながら軍事費は膨らむばかりです。原告には孫が７人いますが、戦争には出したくありません。子孫に絶対戦争をさせないことこそが、戦没者に応える唯一の道であります。

大谷派教団も戦時中は戦争協力をしてきました。教団は戦没者への賞典として『院号法名』を無償授与しました。原告はそのことは戦争協力であると思い、その反省と慚愧の意味で『院号』を教団へ返還いたしました。

５．靖国神社の目的

宗教法人『靖国神社』の目的に「本法人は明治天皇の宣らせ給うた“安国”の聖旨に基き、国事に殉ぜられた人々を奉斎し、神道の祭祀を行い、その神徳をひろめ、本神社を信奉する祭神の遺族その他の崇敬者を教化育成し、社会の福祉に寄与しその他本神社の目的を達成するための業務を行うことを目的とする」とありますが、靖国神社を信奉しなかった祭神にとっては、祭神であることは“安国”に奉仕する永遠の奴隷であり、靖国神社を信奉しない遺族は、靖国神社は切り捨てることは出来ても祭神は切り捨てることは出来ないジレンマに落ち入り、地獄の苦しみを受けます。

何卒祭神とその遺族に対して靖国神社を信奉しない自由をお与え下さい。

―西山誠一さんの心意気―

畑の中に建てられた作業場建物の壁一面に書かれています。一度現場を訪れて、「元気」をもらってきたいですね。

「祖先の霊、持ち帰りたい」

靖国提訴の遺族ら訴え

「これ以上遺族の思いを踏みにじることは許さない」。合祀（ごうし）取り消しの要請を拒んできた靖国神社に対し、元軍人・軍属の遺族が十一日、司法の判断を求め提訴した。大阪市内で記者会見した原告の一人、台湾先住民の楊元煌さん（五）は「祖先の霊を持ち帰りたい」と訴えた。

楊さんは、台湾先住民で構成された「高砂義勇隊」の一員として従軍した親族の唯一の遺族として訴訟に参加。親族は乗っていた輸送船が爆撃を受け、一九四五年七月に戦死したとされ、靖国神社に日本名の「川島昇」で合祀されている。

楊さんの祖父らは戦前、日本兵に殺害されたという。「祖父らを殺した日本兵と同じ神社に無断で祭られた霊を解放し、家族の墓に納めて追悼したい」との希望は、合祀が続く限りかなわない。

靖国神社には約二万八千の台湾人が祭られている。楊さんは「先住民に培われた文化を勝手につぶすことは容認できない」と語気を強めた。

原告団長の菅原龍憲さん（六六）は、僧侶だった父龍音さんが合祀されている。「僧侶が神社に神として祭られていることは異常だ」と二十年にわたり靖国神社に取り消しを求めてきたが、神社側は応じない。

法衣姿の菅原さんは「合祀を受け入れない遺族は大勢いる。誤った国策の下で犠牲を強いられた戦没者を『英霊』とたたえるような欺まん行為は許されない」と話した。

東京新聞
06-8-12

キャンドル行動報告

高橋　靖

今回の一連の共同行動・反靖国キャンドル行動の概要はだいたい下記のとおりであった。

［８月１１日（金）］

・まずは１５：００から参議院議員会館での反靖国集会で今回の一連の行動がスタート。韓国より１０人の国会議員による靖国神社真相調査団、台湾より陳明忠・馮守夫妻が参加。日本の国会議員も休会中にもかかわらず、この集会をお世話くださった沖縄の糸数慶子氏の他、社民党より福島みずほ氏、保阪展人氏、共産党より笠井亮氏・緒方靖夫氏の５名が本人参加され、計約１００人以上が集まった。

・その後１６：００より約１時間、韓国、台湾、沖縄訴訟団、今回のキャンドル行動実行委員会の質疑書や意見書を内閣府に対してを提出している間、われわれは首相官邸前で首相の参拝や戦没者の靖国強制合祀に反対する抗議行動を展開。

・１９：００より弁護士会館にてキャンドル行動開始集会後、２０：００よりキャンドルデモ出発（日比谷公園廻り）。当初予定外の韓国の国会議員も含め、約２００人程度。

［８月１２日（土）］

この日、台湾より４５名の後発隊が成田に到着（先発隊・チワス・アリさん、楊元煌さんら５名は１１日大阪地裁に「靖国合祀イヤです訴訟」提訴のため１０日に来阪）。

１８：３０に常磐公園で合流し、１９：００に銀座キャンドルデモに出発。最初はちょっと集まりが悪いかなと思ったが、いつのまにか約（３００人）程度のデモ隊になっていた。

［８月１３日（日）］

この日は１５：００より、日本教育会館にて屋内集会。

第１部は、韓国、台湾遺族による証言と高橋哲哉さんの講演。

第２部は、コンサートで、台湾原住民の「飛魚雲豹音楽工団」と韓国伝統音楽の演奏。１０００人以上の参加でホールが満杯となり、大盛況のうちにおわった。

集会後、１９：３０より、再度キャンドルデモ。

［８月１４日（月）］

この日は明治公園で屋外イベント。

朝からテント設営等準備し、１３：００より野外コンサート。前日の「飛魚雲豹音楽工団」、韓国伝統音楽他、アーチストが集結。

１９：００すぎ、ちょうど暗くなったころ、約１０００人が結集し「ＹＡＳＵＫＵＮＩＮＯ」のキャンドル人文字を完成。マスコミのヘリコプター取材も来る。

［８月１５日（火）］

この日は当初予定であったが、早朝に小泉首相が靖国参拝する可能性があったので、台湾組がどうしても早朝に靖国神社へ抗議行動に行くということになったので、早朝から何人かで靖国神社へいっしょに行く。６：４０ごろ千鳥ヶ淵の方から靖国神社の方へ来た台湾の隊列に右翼が襲いかかってきて、機動隊は右翼から台湾の隊列を守ったものの、逆に台湾の隊列も靖国神社へ入れないよう制止されてしまった。台湾隊は抗議したが、東京行

動の中心になっていた内田弁護士の説得により靖国神社の目の前の公園にすわりこんでの１時間以上にわたる抗議や歌、掛け声による抗議行動となった。

その中、その抗議行動にもかかわらず、小泉首相は７：４５ごろ靖国神社参拝を強行。８：３０からは予定どおり坂本町公園に集まりデモに出発。東京駅前から銀座をとおり日比谷公園まで約７００人結集し小泉の靖国参拝抗議デモをした。

今回、残念ながら参拝を阻止できなかった。私は本当に腹立たしいとともに、日本人として恥ずかしい思いだ。しかしながら、今回の一連の抗議行動は、「靖国合祀イヤです訴訟」提訴ともあいまって、これほど大々的に「反靖国」をアピールできたことは大きな成果だと思う。今後とも、反靖国、反戦の運動をとも連体してに闘っていこう！

8/15ルポその１　「ウーッホッホーッ」愉快なボディーガード　河南町 F.T

盆に靖国行動に参加してくれと言われ、二つ返事で了承した。１２日から参加すると言っていたけれど、１３日に東京に行ってくれ、とのこと。かまへんよ、と言っておいたら、なんとチワス・アリのボディーガードとのこと。空手やってたやろう、とのことだったけれど実戦の経験はないので、あまり自信はなかったけど、まぁなんとかなるやろう、と引き受けた。

実際には１１日から付き添いが始まり、靖国神社相手の合祀からの除名を求める訴訟、エル大阪報告集会、翌日はぶらっと関西で矢田の温泉に入浴し、ショッピングセンター回り。１３日は刻む会の集会から東京へ。

東京に着くと、台湾担当の外事が、密着。緊張感が高まる。なんでも、台湾で、日本の右翼が建てた「高砂義勇隊碑」をチワス・アリさんらが、最近撤去させたとかで正味狙われているらしい。

東京では台湾からの本体と合流。色々と行動があったが、私は京都のメンバーと２人でずっとそばに張り付いた。初めての任務で、どうするものかわからないなりに、とにかく２人のうちどちらかは必ず彼女のそばにいるようにしていた。結局、何事もなく終わり、良かった良かったとなったが、何事かあったらどうなっていたのか、まるきり自信はない。

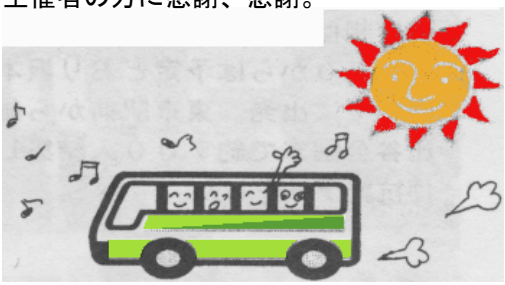
しかし、チワス・アリは全く魅力的な人物であった。東京での初日の行動が終わり、バスでホテルに引き揚げるとき、ずっと行動をしていて皆疲れているだろうに、彼女はバスの中でマイクを握り、独特のあれは何というのか、「ウーッホッホーッ」という気勢を上げて騒いだ。何人かが紹介されて、「ウーッホッホーッ」と叫ぶ。そのできばえによって、拍手やら、笑いでバスが揺れる。私も紹介されて「ウーッホッホーッ」。いくつもの民族が来ている。それぞれが自己紹介である。残念ながら中身はわからない。通訳が言ってくれる。「彼女はタイヤル族（確かそういったような気がする）で、台湾で熊と戦えるのはタイヤルの女だけだと周りから言われている」

早朝５：３０靖国神社前座り込みから戻ってきた台湾の仲間たち

ようである。
　まるで、修学旅行のバスの中のような騒がしさでホテルに着いた。

　彼女が原住民の運動の先頭に立ち、大きなうねりになっているという。納得してしまう、その行動力と魅力。皆の気持ちを引きつけ、引き立てる力。聞くところによると、「原住民」と言う言葉が自らのアイデンティティーを押し出す言葉として、「復権」しているらしい。彼らが全体として持つ生き生きした表現力、リズム感。ずしんと胸に響いてくる。

その彼らが、日本の侵略と山岳少数民族に対する虐殺、そして又帝国主義の先兵としての使い捨てに抗議してあげる叫び。しっかりと、日本社会の中に響かせていかなくてはならない。
　本当に楽しい闘いの数日間であった。企画した主催者の方に感謝、感謝。



8/15ルポそのⅡ　「元気の出る」靖国参拝？？　永井　美由紀

　ここ数年、一度は行ってみたいと思っていた「８・１５ の靖国」。今年は念願かなって、この日に東京にいることができた。キャンドル行動の最後のスケジュール＝１５日朝のデモが終わった後、記者会見はパスして、靖国神社へ。
　九段下の地下鉄から地上に出ると、ビラをまく人が何人もいる。ただし、まかれているビラ等の内容は・・・「靖国神社の清掃奉仕」「教育勅語の復活」「百人斬訴訟集会」「西尾幹二講演会」「ＤＶ冤罪と闘う」「外国人参政権反対」等々。
　大鳥居をくぐって参道へ。参道は人でいっぱい、すごい人出。両側には「国民会議」や「英霊にこたえる会」などが、机を出して販売＆入会申込みをしている。参道では「国民会議？」らしいところが総会をしている。（もうひとつ、小振りの人数で集会をしていたところがあった）。第二鳥居をくぐり、神門を入ると、参道いっぱいに参拝の順番待ちの人。参道を戻ると、「祝小泉純一郎閣下靖国参拝西村修平」の横断幕を出ていた。
　１時半からは、全水道会館での「反天連」の集会へ。主催者の予想を超える盛況ぶりで、２００名弱が参加（お話は、太田昌国さんと西尾市郎さん）。集会の後は、九段下近くまでのデモ。白山通りを南下して靖国通りへ。靖国通りへ入ってとたん、「反天連帰れ」「参拝バンザイ」と右翼が叫ぶ。講師の名前も呼ばれている。隊列につかみかかってくる者も。１３日夜のキャンドル行動の際のデモとは比較にならない、全然違うタイプだ。先頭の宣伝カーにも殴りかかってくるため、宣伝カーを隊列が包む形になっていた。九段下交差点の一筋手前を曲がって、狭～い空き地で解散。後は、久しぶりの人達とちょっと一杯。
　１５日は早朝から台湾勢と一緒、最後は反天連のデモで、元気一杯になって戻ってきました。うん、楽しかった！

こわ～いおじさんたちの一団！

8/15 「さん！ぱい！はん！たい！チャチャ！チャッチャチャチャ！」

ルポそのⅢ

平良　孝子

２００６・８・１５

ＡＭ４時３０分、起床

ＡＭ５時１５分、たまごさんと、ホテル出発。靖国神社へ向かう。外は雨。靖国神社の大鳥居を右手に見ながら、インド大使館横の道へ進む。隣接する遊歩道の奥から、ザッ、ザッというたくさんの足音が聞こえてくる。緊張した面持ちの台湾原住民の方々、その回りを三々五々守るように取り囲む大阪の支援者。私とたまごさんは、すれ違う人たちと、目礼を交わしながらユーターンして、列の最後尾に付く。昨夜の打ち合わせで、もし右翼と小競り合いになった場合とか、もし警察に拘束された場合とかを、たぶん経験者らしき方からレクチャーをうけたので、大阪の支援者の顔もいつもより締まっている。打ち合わせどうり拘束を想定して携帯電話を預かる。台湾グループには、国会議員のチワスアリさんがいるので、拘束されることはないが、日本人は捕まる可能性があると。私が預かった物は、Ｈさんの財布とＴさんの下着の入ったビニール袋。Ｈさんは普段でも物を失くしそうな方なので納得。Ｔさんは下着の入ったビニール袋？危ない下着かな？Ｔさんはとても優しい方なのだが、見た目が強そうなので、チアスアリさんのボディガードに抜擢された方。（因みにボデーガードは、もう１人 M さん。この方も心優しい方なのだが､見た目が強そう・・・恐ろしそう。）

ＡＭ５時３０分、遊歩道の端、道路を渡れば靖国神社というところで、警察に止められる。

私とたまごさんは、少し離れた所で、右翼の襲撃見張り番。雨上がりの遊歩道に、チアスアリさんの凛とした声と、台湾グループの朗々とした歌声が響く。説得を続ける警察に丁寧にはっきり想いを伝えるチアスアリさん。時々、右翼の街宣車から投げつけられる聞くに堪えない罵声。

ＡＭ７時１０分、「小泉さん官邸を出た」と。報道のヘリコプター、５，６台上空旋回。

ＡＭ７時２０分、チアスアリさんを先頭に台湾グループが、もと来た道へ帰っていく。皆、顔を揚げ前を見据えて。思わず大阪支援グループから拍手が起こる。

ＡＭ７時５０分、上空の、ヘリコプターが帰っていく。空を見上げながら暗澹たる思い。

ＡＭ８時３０分、茅場町の坂本公園で靖国参拝抗議集会。その後、渋谷公園まで抗議デモ。私の後ろで韓国の若い元気な数人が、「こんな暑い中のデモ、どうせやるなら楽しくやりましょうよ！一緒に、踊りましょうよ！」と誘われる。ふと横を見ると、徐さんと巽さんが、老体に鞭打って楽しそうに踊っている。私もつられて踊ってしまう。

さ！ん！ぱ！い！は！ん！た！い！チャ！チャ！チャチャチャ。チャ！チャ！チャ！イエーイ！！

ＡＭ１０時、デモ解散後、たまごさんと靖国神社へ。「祝小泉純一郎閣下靖国参拝」の横断幕。

たくさんの人から、「参拝ご苦労様です」「小泉首相参拝、よかったですね」と声が掛かる。

祝福ムードの熱気の中を、たまごさんと無言でずんずん歩く。

ＰＭ１時３０分、８・１５東京集会実行委員会主催、日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）靖国神社問題委員会後援の集会に参加。会場は、１３日の「証言とコンサート」が行われた日本教育会館。２日前の熱気溢れる抗議集会とは打って変わって、靖国参拝した小泉さんに対する静かな怒りが会場を包む。帰る時間が迫っていたので森井真氏（元明治学院大学学長）の講演の途中で退席。

ＰＭ５時、帰る飛行機の中は黒い礼服に身を包んだ日本遺族会の方でいっぱい。聞こえてくる会話は小泉さん賛美。伊丹空港では日の丸を振りながら「参拝ご苦労様」とお出迎え。

２００６年８月１５日は、こうして暮れていきました。

戦争をするための靖国神社に、「２度と戦争をしないため」参拝するという小泉さんの欺瞞。

侵略戦争を推進し、植民地支配した人々を動員して死に追いやり、今も「英霊」として合祀続ける靖国神社。そして合祀はいやだという台湾、韓国、沖縄、日本の遺族の声を黙殺し続ける靖国神社。その靖国神社を真正面に被告とする裁判が、始まりました。今の日本の状況はとてもしんどいけれど、渋谷公園までのデモで出会った韓国の若い人たちが言った様に「どうせやるなら、楽しくやりましょう！」

8/15ルポそのⅣ

「僕の胸にキャンドルは灯ったか！」

関西共同行動　古橋雅夫

「平和の灯を！ヤスクニの闇へ　キャンドル行動」と銘打った五日間の行動のうち、十二日からの四日間の連続キャンドル行動に参加した。関西のメンバーは、右翼の妨害から台湾・韓国の参加者を防衛すべし・・・という任務を与えられた。もっともとりわけ台湾の原住民の人々は僕らよりも体格がよく、右翼の街宣に対してもひるむことなく反撃した。また東京のメンバーは、地元とはいえ、周到に回りの動向から目を離すことがなく、つけまわす右翼に対し警察警備の不手際にキッチリと抗議し、僕らを安心させた。そういうわけで、申し訳ないが僕自身はこの間の行動のすべてを充分に堪能し、楽しんだ。そして行動が終わるごとに飲み屋での交流は盛り上がった。緊張したのは最後の十四日の夜から十五日の朝にかけてのことだ。

昨年、バスでの靖国神社への抗議行動を途中警察に阻止された経緯のある台湾原住民は、今年は「隠密に」夜明け前に靖国神社に行き、堂々と抗議する、あわよくば小泉の参拝に直接抗議するという話を聞かされた。右翼が黙っているか？下手すれば日本人側で逮捕者が出ることは必至・・・と覚悟を迫られるし、「当然我々も同行すべし」という声。矢面に立つ東京の面々は各陣営に散会した。朝４時半起床。始発の地下鉄に乗る。言葉少ない面々。途中タクシーで千鳥ヶ渕に向かう。身元の分かる持ち物は一切持たず。はたして・・・・。

続々とタクシーが到着する。そして降り立った台湾原住民は一部警官の制止を物ともせず、あれよあれよという間に一路靖国神社をめざして行進を開始した。しかし靖国通りの手前で行進が阻止され、やむなくその場で２時間近い座り込みとなった。いつのまにか彼等に呼応する多くの日本人が周りに集まっていた。僕はようやく我を取り戻し、互いに見知らぬ人々ながら、思いを同じくするという一体感に充ちていた。行動する仲間の高揚感はこうした所から生じるものだろう。「小泉が今官邸を出た」と情報が入る。空では４台ものヘリコプターがやかましく旋回し始めた。騒然とした雰囲気の中で、台湾原住民の怒りは頂点に達した。うーん、これ以上は書けん。紙面がないのよ。

琉球新聞

ろうそくの灯で浮かび上がった、靖国参拝に反対する「YASUKUNI　NO」の人文字＝14日夜、東京都新宿区の明治公園で共同通信社ヘリから

8/15

靖国に平和の光を

韓台日沖の市民や遺族　人文字で参拝反対

小泉純一郎首相の靖国参拝に反対する韓国、台湾、日本の市民や遺族らが十四日、東京都内の公園に集まり、ろうそくを掲げて「YASUKUNI NO」の人文字をつくり、参拝反対をアピールした。

この日は韓国や台湾、沖縄の歌手らが集い、平和を訴える野外コンサートを開催。その後、参加した約八百人が灯をともしたろうそくを手に人文字をつくった。

「平和の灯を！ヤスクニの闇へ　キャンドル行動」と名付けた抗議行動の一環で、遺族らは「侵略戦争を指導したA級戦犯を顕彰する靖国神社に首相が参拝するのは、侵略を肯定するものだ」と反発を強めている。十五日も抗議のデモ行進を計画している。

朝日 8/15 06

「戦死の兄 除隊を」

合祀取り下げ提訴の遺族 いまも「大尉」嘆く

戦死した2人の兄を返してほしいと、大阪府箕面市の古川佳子(むこ)さん(79)は11日、靖国神社に合祀(ごうし)取り下げを求める訴訟を大阪地裁に起こした。敗戦から61年。遺族の苦しみは今も続く。

小泉首相は「不戦の誓い」を靖国参拝の理由にあげた。しかし、古川さんは「不戦を誓うのであれば、空襲や原爆の犠牲者、日本の侵略によるアジアの犠牲者すべてを追悼する施設をつくるべきでしょう」と話す。

46～47年、「死亡告知書」が届いた。長兄の小谷啓介さん(享年27)は45年5月にミャンマーで、次兄博さん(同24)は44年12月に台湾沖で戦死したとあった。遺骨はなかった。

母は、息子を奪われた怒りと悲しみを短歌によむようになった。「是(これ)れに増す 悲しき事の何かあらむ 亡き児二人を返へせ 此手(このて)に」。怒りは癒えぬまま、74年に81歳で世を去った。

古川さんはその後、戦没者をまつる忠魂碑を市が公費で移したことを違憲と訴えた「箕面忠魂碑訴訟」の原告になった。

「兄は天皇に忠義を尽くすために死んだのではない」。母の思いを受け継ぐための裁判でもあった。大阪地裁は違憲判決を出したが、同高裁、最高裁は合憲と判断した。

兄2人の合祀の確認を靖国神社にしたところ、今夏、神社から届いた書類を見て驚いた。兄2人の名に「大尉」「軍曹」との肩書があった。「兄は死んでもなお軍隊にとらえられ、このままだと永久に除隊されないままだ。解放してほしい」

この夏も庭でオオマツヨイグサが咲いた。母は生前、土手に咲いた黄色い花を見て「けいすけー、ひろしー」と兄の名を大声で呼んだ、と話していた。黄色い花を見ると、兄と母の姿が浮かぶ。そんな日常の営みが死者を悼むことだと思う。

(中野晃)

戦地の2人の兄から届いた約200通の手紙や戦地に赴く前の日記を見る古川佳子さん＝大阪府箕面市で、荒元忠彦撮影

推薦本ご紹介

その１

「沖縄から靖国を問う」

著　者：金城　実
出版社：宇多出版
価　格：￥１０００

集団強制死の住民までも準軍属として合祀、その歴史のからくりが明らかに！

その２

今回の提訴に合わせ、台湾から届きました

「合祀除名・我　不是日本人」

価格：￥１０００

何故靖国神社からの合祀取消を求めるのか、日本の台湾（原住民）植民地支配の歴史を写真で紹介する。
（日本語訳付）

両書とも必要な方は事務局に FAX かハガキで申し込んでください。送料として一律

事務局よりのお知らせ

◆初めまして。通信１号です。通称「イヤです通信」とでも言いましょうか。この通信は原告、共に闘う皆さん、支援の皆さん等を「つなぐ」と言う役目を果たすものだと思って心を込め、力を込め、編集していきます。どうぞよろしくお願いします。
◆皆さん、お便りたくさんくださいね、つながりの実感が本当に大きな力になります。
◆「ころさない・ころされない・ころさせない」と「非戦」の文言＝思想はどうしても引き続きこの訴訟のこころとして残したかったので、代わり映えしない通信デザインになってしまいました。しかし、ここは真髄、譲れませんねぇ～。
◆「不戦」とは、戦えるけれど今はやめておこう！「非戦」とは、なにがなんでも戦争はしない！と言うことですね。「非戦」とは、ある意味この現代社会では「普通でない」のかもしれない。しかし、でも、私はあえてこの「非戦」をかかげ続けたい。「ころさし・ころされ・ころさせる」のが断じていやだから、である。

◆こんな気持ちをもって、この通信、編集を「アジア訴訟通信」に引き続き担当する事になりました。ついでに会計も引き続きの担当です。ちなみに事務局長も菱木政晴が続きです。変わり映えせず、まったく人材不足です。事務局員の高齢化もずいぶん進んでいます、誰かいないかー！すけてちょうだい！

●事務局では、訴訟＝靖国問題の情宣のため、リーフレットをもっと広く配布していこうと準備しております。会員、支援者の皆さんの回りでも配布していただければ、必要枚数お送りしますので事務局までご連絡下さい（無料）。会員拡大にご協力を！

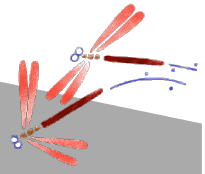
by 徐

会計より

●すでに多くの皆さんが「共に闘う会」に結集していただいております。思いのほか大きな反響、既に第一回弁論期日も入り、出出し好調です。

●たくさんのカンパ・会費入金いただいております。ありがとうございます。郵便振込下さったものについては勝手ながら領収証の発行を省略させていただいております。ご了承ください。特に領収証が必要な方はその旨「通信欄」にてお知らせ下さい。お送りします。

by 徐



読者からのおたより

★ 8/17　確か原告になりそびれていると思うので・・、少なくて申し訳ない思いです（大分 H.M）
【事務局より】ありがとうございます。新訴訟よろしく！
★ 8/18　私たちは靖国合祀取消訴訟に連帯します（大阪 N.J & M.G）
【事務局より】たくさんのカンパありがとうございます。みなさんの「靖国問題」への取り組みに敬意を表します。平和に向け、引き続き共に歩みましょう。
★ 8/21　訴訟の勝利を願い支援いたします（茨城 M.I）
★ 8/21　応援します（兵庫 G.U）
★ 8/24　サポーターとしてささやかながら（京都 H.M）
★ 8/25　忠魂碑訴訟を支援し始めて 15 年が過ぎました。おかげで「靖国」の勉強をさせていただきました。私の念願通り韓・台の遺族が立ち上がりました。
（泉南 N.N）
★ 8/25　入会希望します。ともに闘いましょう（長野 Y.T）